ということです。ITに関する書物もまた巷にあふれています。しかし生きた技術として、あるいは相互に関連する技術としてとらえられている場合は少ないといえます。そこでe-ビジネスという1本の串でITのバラバラな要素技術を串刺しにして理解できるようにすることに本書の力点を置きました。ITをそれが使われるコンテクストと切り離して説明することは、死んだ生物の組織を切り取って顕微鏡で観察することと似たようなところがあります。本書ではITの重要な適用分野としてe-ビジネスをとらえることにします。言い換えればe-ビジネスの構築に重要な役割をはたす構成要素の一つとしてITを位置付けて説明するようにしました。もちろん、もう一つの構成要素はe-ビジネスモデルそのものです。情報リテラシーもさることながら、今後ますますインターネットビジネスを利用することになる一般の消費者にとって、関連する情報システムの中身がブラックボックスのままでいいわけはありません。一方e-ビジネスモデルの作成者にとってはITの仕組みを理解することは、もちろん必須です。したがってITについて、e-ビジネスに関連する側面はできるだけ詳しく説明し、関連の少ない部分は大胆に簡略化して説明しています。そうはいってもITの全体像については十分俯瞰できるように配慮しています。

## 0.2 本書の対象読者と記述レベル

本書の対象とする読者は、大学の理工系の基礎コースや文科系の専門コースなどで学ぶ学部学生、および最新のe-ビジネスやITを体系的に学ぼうとする社会人です。本書はe-ビジネスと情報技術の両方の教科書として使えるようになっています。また学部レベルの情報システム構成論またはWebデータベース構成論の教科書としても使えるようになっています。本書の記述に関しては、極力平易に説明することを心がけました。できるだけ式を使わないで、直感的に理解できるように説明しました。ただし式を使ったほうが正確に説明できると判断した場合は、できるだけわかりやすい表現を使うようにしました。

しかし内容に関しては基礎的なことはもちろんのこと、できるだけ最新の研究動向まで含めるようにして、この分野の教科書にふさわしい水準を保つようにしました。さらに進んだ学習の入り口になるように適切な参考文献やWWWのURL（ホームページのアドレス）をつけました。URLについては執筆時点において最新のものを掲載しましたが、URLはしばしば変更される場合があります。もしURLが古くなっていたらWebサーチエンジンを使って特徴的なキーワードで検索することをお勧めします。そうすればたいていの場合、最新のURLが得られます。例えばWebサーチエンジンの代表であるYahoo！JAPAN（www.yahoo.co.jp）を使って『通信白書』というキーワードで検索すれば2000年度総務省郵政事業庁（旧郵政省）の作成した通信白書のページのURLが得られます。さらに本書では全体的に人が技術を作り出してきたという立場を鮮明にしました。したがって記名する価値の高い人名はできるだけ取り上げること